



石川県立
小松高校

進路指導体制の組織化

組織力を生かした「小松メソッド」で生徒の力を伸ばす

◎創立以来の校是は「自主自律」「文武両道」。2003（平成15）年度から石川県「いしかわスーパーハイスクール」、06（平成18）年度から文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。校舎は三代目加賀藩主前田利常の隠居城小松城址内にある。

設立	1899(明治32)年
形態	全日制／普通科・理数科／共学
生徒数	1学年320人
11(平成23)年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、金沢大、東京大、東京工業大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに250人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、立教大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ402人が合格。
住所	〒923-8646 石川県小松市丸内町二ノ丸15
電話	0761-22-3250
Web Site	http://www.ishikawa-c.ed.jp/~komafh/

変革のステップ

背景

◎組織的・戦略的な進路指導体制が整っておらず、難関大受験者も少なく、進路実績は横ばい

STEP 1

実践

◎「学習の記録」で生徒の学習状況を把握し、学年集会の充実で学校の一体感を醸成するなどの「小松メソッド」を確立

STEP 2

成果

◎生徒の学校への信頼感が向上。改革初年度の卒業生の国公立大現役合格者数は200人を突破。今年度は277人と過去最多

STEP 3

「待ち」の姿勢が目立つ生徒
自主自律を柱とした指導を見直し

石川県立小松高校が学校改革に本格的に取り組み始めたのは、2003（平成15）年のことだ。以降、新たな取り組みを導入しながら、成果の見られたものを継承する形を繰り返して、独自の指導体系「小松メソッド」をつくり上げてきた。改革の背景には、組織的・戦略的な指導体制が確立されておらず、教師によって指導にばらつきがあるという課題意識があった。進路指導課主事の紺矢亮一先生は次のように話す。

「本校は以前から地域の拠点校として、成績上位層の生徒が多数入学していましたが、難関大を志望する生徒はさほど多くなく、改革前の数年間は進学実績が横ばいでした。校訓である『自主自律』の精神に基づき、生徒の志望を尊重する指導をしてきましたが、全校体制で組織的に指導を行えば、もっと生徒の力を伸ばせるのではないかという思いがありました」

生徒の気質の変化も、学校改革に着手した大きな理由だ。10年ほど前から、学習に対して「待ち」の姿勢の生徒が目立ち始め、自主性に任せる指導だけでは対応が難しくなっていた。例えば、難関大を志望する生徒を集めて問題集を紹介すると、以前は自分で購入していたが、その頃からは、教師が用意するのを待つようにな

り、ほとんどの生徒は自ら動かなくなつた。そのような受け身の姿勢は、成績にかかわらず多くの生徒に見られたという。

こうした課題意識のあつた03（平成15）年に、同校は県の「いしかわスーパーハイスクール」に指定された。校内に改革の機運が高まり、当時の校長が自ら全教師の授業を見学するなどして授業改善に乗り出した。続いて、教師の組織的な体制による学力向上策や、生徒がチームとして受験に臨める集団づくりなどの取り組みを充実させ、「小松メソッド」の七つ道具（*）



石川県立小松高校
紺矢亮一 Konya Ryoichi
教職歴27年。同校に赴任して14年目。進路指導課主事。「全ては1時間のために、全ては生徒たちのために」



石川県立小松高校
田中真治 Tanaka Shinji
教職歴27年。同校に赴任して4年目。1学年主任。「大吉を引くコツは、大吉が出るまで引くこと」



石川県立小松高校
土山樹一郎 Tsuchiyama Kitchiro
教職歴26年。同校に赴任して4年目。3学年副主任。「攻めの進路指導と刺激のある教育を提供する」



石川県立小松高校
兼近理子 Kanachika Noriko
教職歴14年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「変化の積み重ねが結果を生む」

と呼ばれる同校の指導の軸を定めていった。

「学習の記録」で 生徒個人と集団を引き上げる

改革に当たり、同校が不可欠と考えたのは、生徒の学習状況の把握だ。そこで、生徒が家庭学習の時間を毎日記録する「学習の記録」を取り入れた。これは、1か月で1枚のシートになつており、教科別の家庭学習時間の推移が一目で分かる。月末に提出させ、「学習の記録」のデータを担任がコンピューターに入力して集計し、学年主任が学年全体の平均学習時間などを算出する。

「集計結果は、個人面談で使うのはもちろん、学年全体の学力の底上げにも活用しています。例えば、平均学習時間が例年より下回つていれば、緊急の学年集会を開いて、生徒に発破をかけます。単に『もっと勉強しなさい』と言うのではなく、過年度のデータを示して、『この時期にはこれくらいの勉強が必要だ』と自校の先輩のデータを基に説明する方が説得力があり、生徒も真剣な表情で耳を傾けます」（紺矢先生）

同様に、個人面談でも先輩の学習時間を示して、「この大学の合格を目指すなら、まだ学習が足りない」などと伝えると、生徒は納得しやすいという。

学年集会を充実させ 「チーム」としての一体感を持たせる

生徒にチームとしての意識を高めるために充実させているのは、学年集会だ。学年全体で集まる機会を最低でも2か月に1回は設ける。

「良薬も効果がずっと続くものではありません。学校の方針を常に生徒に行き渡らせるために、少なくとも2か月に1回は学年全体で集まる必要があると感じます」（紺矢先生）年間行事に組み込んだ全員参加の学年集会以外にも、課題があれば、対象者を絞って昼休みの10分間に集会を開く。10（平成22）年度は「理系ハイトップ集会」「英語苦手者集会」など3年生対象の集会を50回近くも開いた（P.18図）。3学年副主任の土山樹一郎先生はこう話す。

「参加する生徒は一部であっても、その集いで話した内容は学年全体に驚くほど伝わります。学年集会が学年の雰囲気を決める大きな要素になっていると感じます」

2学年担任の兼近理子先生は次のように話

す。「10分でも集会で教師が語り掛けることによって、生徒は今しなければならぬことが何かを実感できるようです。また、数人でも生徒を集めて『集会』の形にすると、生徒個々に伝えるよりも『皆で頑張る』という雰囲気が生まれやすくなります」

*同校では、学習の記録、週末課題、学年集会、朝自習、添削指導、特別補習、これらの取り組みを支える組織力を七つ道具と位置付ける

図 10 (平成22)年度の3年生の学年集会 (抜粋)

日程	集会名	内容
4月12日	学年集会	決意表明
4月14日	数学トップ集会	東京大、京都大、一橋大、東京工業大の添削の説明
4月15日	英語トップ集会	英文解釈・英作文添削の説明
4月16日	学年集会	1年間の方針・流れを各科目より説明
6月7日	学年集会	高校総体後の補習などの説明
6月10日	文理ハイトップ集会	学習方法について数学科、地歴公民科より説明
6月11日	学年集会	模試分析・8月までの動きを共有
6月15日	理系集会	理科の現状に対して報告
7月13日	英語苦手者(ACE)集会	マークシート試験対策演習の説明
7月16日	進路講演会	夏休み前の天王山集会
9月3日	学年集会	センター試験5か月前集会・進路の手引き解説
9月10日	学年集会	センター試験出願説明
9月14日	理系ハイトップ集会	数学・理科の学習法指導
11月5日	学年集会	出願・受験計画の説明
12月17日	学年集会	進路指導担当者から愛のこもった最後の激励
1月14日	センター激励会	学校長激励(放送)、全校生徒で頑張ろう三唱
1月17日	数学科	スタートダッシュ演習
1月27日	東京大・京都大出願者集会	心構え、激励
2月10日	終業式	学校長・学年主任・進路指導課主事から激励

*学校資料を基に編集部で作成

学年集会では、情報の伝達にとどまらず、『受験は団体戦』という考えの下、チームで受験に臨むという雰囲気をつくることを心掛ける。

「1年間で学年会全ての教師が話すようにしています。教師によっては自分の高校時代の体験などを話し、温かくユーモアのある学年集会となっています。これは、生徒集団づくりだけでなく、教師と生徒のつながりを深めることにも一役買っています。学年集会を楽しみにしている生徒も多く、教師の話に熱心に耳を傾けてくれています」(土山先生)

学年集会では、叱咤激励したり、受験に向けて頑張る生徒にねぎらいの言葉を掛けたりするなど、時期に応じて内容を練る。例えば、09(平

成21)年度の3年生2学期の集会では、1・2年次の担任で今は他校に異動した教師からの激励のメッセージをビデオで流した。これに感動して勇気付けられた生徒も多かったという。

また、生徒に指導内容を十分に伝えるために、「三度塗りメソッド」を活用する。例えば、数学に課題があった場合、まず学年集会で「これから数か月間とはにかく数学を頑張つてほしい」と伝え、その後、学級でも担任がそれぞれの言葉で同じ内容を伝える。更に、個人面談で、生徒一人ひとりの状況に合わせて数学の対策を進めるように声を掛ける。同じことを3回伝え、全ての生徒に指導を行き届かせるのだ。

「今の生徒は全体に向けて話をするだけで

は、あまり自分のこととは受け止められないようです。個人面談も含めて3回、同じ内容を繰り返せば、個々の生徒に浸透し、生徒同士の話題にも上ようになります。学年集会での発信は、教師の足並みをそろえることにも有効です。数学の教師が英語を頑張るように生徒に伝えるなど、教科間の連携を強めるきっかけにもなっています」(兼近先生)

全教師が協力して添削指導を実施 教科指導の向上にもつながる

学力向上対策で力を入れるのは、3年生での添削指導だ。国語、数学、英語は通年、理科はセンター試験後、地歴公民は9月から実施する。内容や量は教科によって異なり、数学では自作のプリントの配布、英語では問題集の該当ページを指定するという具合だ。希望制ではあるが、現在は半数以上の生徒が受けている。

提出された課題は基本的に翌日に返却する。負担は大きいですが、生徒が自分のつまずきを翌日には検証でき、学びに向かえる意義は大きい。教師にとっても、生徒の最後の「伸び」を把握し、支援できるなどメリットも多い。

出願校が最終的に決まる12月頃からは、過去問題や小論文の添削も行う。量が増えるため、1・2年生の教師も協力し、大学ごとに担当を割り振るなど手分けをして指導する。

「添削指導を通して受験直前の生徒の学力や自校の生徒の傾向を踏まえた上で入試問題分析が出来るのは、1・2年生の教師にとっても大きなプラスです。つまりよくポイントが分かり、授業改善にも生かされます。特に若手教師にとつて、添削指導は生徒理解や指導の幅を広げるきっかけになります」（紺矢先生）

添削プリントは、3年生の教室の近くに置いてある。ある時、3年生の人数に十分足りる枚数を用意したはずなのに、数学のプリントが足りなくなったことがあった。調べてみると、2年生の成績上位層が自主的に取り組んでいたことが分かり、2年生の希望者にも数学と英語の添削指導を始めるようになった。

低学年から「受験は団体戦」を意識的に伝える

1・2年生の学力向上策としては、朝自習や終礼プリント、週末課題が中心となる。1学年主任の田中真治先生は次のように話す。

「本年度の1年生は数学に課題が見られたので、数学強化月間を設け、朝学習だけでなく、終礼時10分間で終礼プリントを行いました。毎日、取り組むことで着実に学力が上がると共に、数学への意識も高まりました。年間方針はありますが、学年や時期による課題に応じて取り組みを変化させています」

3年生になって学習に積極的に取り組めるようになる背景には、低学年での志望を高める取り組みがある。大学教員を招いた学部説明会や卒業生による講演を頻繁に実施。1年生から大学の研究内容などを具体的に説明し、偏差値だけではない志望大選びを促す。

「生徒はどのような大学があるのかを知らず、教師が大学について具体的に教えないと志望や目標を持てません。大学の魅力を伝え、十分に志望が実現できることを伝え、喜んで目標を持つようになります」（田中先生）

また、「受験は団体戦」という意識も低学年から醸成していく。

「生徒には『学校の風景の一部になろう』とよく言います。決まった時間に決まった場所で学習する大切さと共に、学校で仲間と切磋琢磨し、学んだ方が効率的であることを伝えていきます。こうした指導は生徒の心に伝わり、自習室で学ぶ生徒は飛躍的に増えました。出願後も、ほぼ全ての生徒が登校して来ることも、学校への信頼感の高まりを象徴していると思います」（紺矢先生）

手を掛けるほど生徒は伸びるほど実感

改革の成果は、05（平成17）年度に国公立大現役合格者が初めて200人を超えたことにも

表れている。今後の課題は、取り組みを形骸化させず、常に進化させていくことだ。例年、学年会の中で数人が一つ下の学年に残り、前年の取り組みを継承しながら、改善を加えてきた。

「現在の『小松メソッド』は完成形ではありません。学校を良くしたいというスピリットを継承しながら、メソッドは生徒の実態に合わせて変え続ける必要があると考えています」（紺矢先生）

その言葉通り、メソッドは進化している。従来、数学は1・2年生での進度を出るだけ早め、3年生で受験に向けた対策に重点を置くという流れだった。ところが、東京大や京都大などの難関大の入試問題は、3年生になってから「考えさせる指導」をしても太刀打ちできないケースが多い。そこで、11（平成23）年度からは1年生から考えさせる指導に重点を置くなど、より早期の対策を取り入れ始めた。

また、近年は素直で教師の話をよく聞く生徒は多いが、今後は生徒たちの知的好奇心を一層喚起し、これまで以上に主体性を育んでいくことが課題であるという。

「手を掛けるほど生徒は伸びる。改革を通じて、そのことを実感しました。潜在能力の高い生徒が多いため、教師がもっと知的好奇心を掘り起こせると考えています。教育の原点である授業を通していかに取り組んでいくかを探っていきたいと思います」（紺矢先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年6月号指導変革の軌跡「三重県立四日市高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)